古都、京都市は観光都市で有名だがバスが元気な街でもあり、都心から離れた郊外のエリアまで隅々に広がる寺社仏閣への鉄道アクセスが整備されていないため、その補完的役目をバスが担っている。

平日の夕方、時間は午後17時30分、僕は八坂神社の前にある祇園の交差点に立って、八坂さんの前を行き交うバスを撮影しようとしていたが、日が落ちて暗くなると僕の持っているカメラでは走行中のバスを撮ろうとしてもどうしてもブレてしまう。

仕方がないので祇園のバス停に停まっている動いていないバスを反対側の歩道から撮影することに目的を変えた。

祇園の街を行き交う、京都市営バス、京阪バス、プリンセスライン、それに直鉄バス、
様々なバスが家路を急ぐ乗客を乗せて様々な目的地を目指してこの街を行き交う。

バスの写真はバスの扉がある公式側の写真は撮れないが反対側の非公式側の写真は少ないながらも自分自身、満足いく写真が撮れた。

来て良かったな・・・・実際に来てみないとわからないものだなと、僕はそう思ってスルッとKANSAI2 day パスを手に取り、大阪へ帰郷することにして、まずは直鉄バスで京都駅へ戻った。

車内は座席がすべて埋まって座れず最初の方は立っていたが、途中、五条坂で私が立っている前の席の高齢の女性が降りて、座って京都駅まで行くことが出来た。

新型肺炎の影響で車内には外国人観光客の姿は見かけず、帰宅ラッシュで家路に急ぐ乗客の姿、インバウンドで海外からの観光客で賑わっていた車内の静けさが幻のように感じた。

季節は秋、紅葉シーズンの平日とはいえ、バスは渋滞にはまることなく、京都駅に到着、降車してから直鉄電車乗り場へ向かい、ホームに降りてから自販機で温かい飲み物でも買おうと思っていたが、特急列車がすぐにホームへ入ってきて飲み物を買う暇がなく、また、疲れていたこともありグリーン車に乗車した。

グリーン車に入ったらすぐに女性のアテンダントの方がいて、私がグリーン券をまだ買っていない旨を伝えると

女性アテンダント「少々、お待ちいただけますか。」

電車のドアが閉まり、動き出してから

女性アテンダント「お待たせしました！どちらまで行かれますか？」
僕「終点の天王寺まで」
女性アテンダントの方がタブレットPCで空席を確認

女性アテンダント「一人席が満席で、二人席の通路側ならご用意できますが？」
僕「それでいいです。」

アテンダントの方がJRの車掌さんが持っているような端末を操作してグリーン券を発券、千円札を一枚取り出して女性アテンダントの方へ料金を支払いお釣りをもらって、指定された場所へ着席、隣には京都から観光帰りと思われる女性がすでに座っていた。

僕は仕事を辞めてから自分でできる在宅の仕事を選び、誰とも会話する日々がなかったので、女性アテンダントの方とのやりとりは久しぶりに家族以外の人と会話したなと、何か落ち着いた気がした。

京都へ行くときの往路の特急は早く目的地へ着いて、良いバスの写真が撮れるかな？まだ、日が落ちないでほしい、そうしないといい写真が撮れない、不安と焦りが入り乱れていたが、今は違う、無事にいい写真を撮れてやり遂げた感がある、不安と焦りはなく、安心と落ち着きを取り戻していたからこそ、同じ特急なのに往路と復路では全く違う雰囲気のように感じた。

特急列車は大阪の天王寺へ向けて闇夜の中を突っ走る。

他の座席の様子を見ていると、机にノートパソコンを置き仕事をするビジネスマン、スタバのコーヒーを置きながらくつろいでいる青年、過ごし方は人それぞれ、十人十色とはこのことだろう、先ほどのアテンダントさんは軽食が入ったかごを持って車内販売にあたっていた。

僕は鞄からMP3プレイヤーを取り出しイヤホンを耳にあて、好きな曲を聞きながら終点までの時間を過ごす、列車の速度は速いが車内の空気はのんびりと、ゆったりとしていた。

思い立ったら吉日、いつも悩んで頭を抱えていた僕、そんな僕がある日突然、今日の午後、ふと思い立ち、京都へ行くことを決意、思い立ったら行動が大切、行動がやがて抱えていた私の悩みを打ち消して、バスを撮るという好きなことへ夢中にさせてくれたから。

動いてみなきゃわからない、家に籠っていては変わらない、そう感じさせられた10月中日の金曜の夜、気づいたら特急列車は地下に潜り、大阪市内へ入り、大阪梅田駅へ到着していた、車内のお客さんの半分が荷物やお土産を片手に降りて行く、ここから終点の天王寺まで空席が目立つ。

鬱々としていた思いがこの特急列車で今日一日を振り返って消えてゆく、行ってよかったな、列車が天王寺駅に到着して私が降車してからは今まで頭を抱えていた悩みが消えていた。

またいつか500円を払って直鉄特急のグリーン車に乗りたい、ホームで車内整理中の特急を振り返ってからホームを後にして、私は帰路に着くため、直鉄線乗り場を後にした。